

あるところに、ばくちの好きな男がいました。ひとつかければひとつ負け、ふたつかければふたつ負け、もうじき子どもが生まれるのに、家には一文のお金もありませんでした。男は、女房のスカートを質屋に入れてお金を借りましたが、そのお金もばくちに使って失くしてしまいました。男は、女房に合わせる顔がないので、そのままよそへ逃げていってしまいました。

家では、女房がいくら待っても、夫は帰って来ません。じきに女房は男の子を生みました。

女房は、つぎの日からもう山へ行って草を刈り、ひとりで子どもを育てました。

やがて、息子は五、六歳になると、お母さんを助けて、草刈りをしては近所の家に売って歩きました。

息子が十三、四歳になった、ある夏の日のことです。息子は、山で働いていましたが、ひどくのがかわれて、水を少し飲みたいと思いました。けれども、山では、何か月も雨が降っていないだったので、どの谷川にも水は一滴もありませんでした。水を探して歩いているうちに、黒い鉢をひとつ見つけました。鉢の中には、きれいな水がたまっていました。息子はよろこんで、ひと口で水を飲みほしました。ところが、飲みほしたと思ったのに、鉢の中にはまだ同じだけの水がたまっています。そこで、またひと口で飲みほしました。つづけばまた何度も飲みほして、もうのどのかわきはおさまりましたが、それでも、鉢の中には、初めて同じだけの水がたまっていました。

息子は、考えました。

「この黒い鉢は、とにかくふしぎな力を持っているぞ。飲んでも水がなくならないなら、この中にご飯を入れたらどうなるだろう。きっと、食べつくせないんじゃないかな。お母さんは、どんなによろこぶだろう」

息子は、鉢を家に持って帰ってお母さんに見せました。そして、鉢をひっくり返して水を流してから、一杯のおかゆを入れました。おかゆは、食べても食べてもなくなりませんでした。お母さんは、ひざまずいて、天の神さまにお礼をいいました。

この黒い鉢が、水やご飯を生み出せるなら、きっとお金も生み出せるはずです。息子は、銅銭を一枚、鉢に入れました。はたして、いつまでも取り尽くせないほど、銅銭が出て来ま

した。おかげで、あつちに傾き、こつちに穴の開いていたあばら家を、新しいりつばな屋敷に建てかえることができました。

ある日のこと、ばくち好きの男が、帰って来ました。男は、家がりつばになっているのを見て、目を見張りました。

「女房よう。ほんとにここがおらのうちかあ」

お母さんは、出てみて、それが自分の夫だと分かりました。すっかりやせおとろえていて見るかげもありません。お母さんは気の毒になって、男を家に入れてやりました。

男は、

「おまえ、どうしてこんな金持ちになったんだ」とききました。そこで、息子が、

「山で、黒い鉢を手にいれたんだ。鉢にお金を入れると、ひとつ取ってもまた一つ出てくるんだ」といいました。男は、おどろいて、

「持つてきて見せてくれ」といいました。そして、黒い鉢を見ると、

「なんだ、こんなありふれた鉢。どんな宝物かと思ったよ」といって、放り投げました。お母さんがあわてて鉢をひろおうとすると、男は、鉢の中を踏みつけました。そして、両足でがんがんと踏んで、鉢の底を割ろうとしました。

お母さんと息子は、いそいで男を鉢の外にひっぱり出しました。ところが、男が鉢の外に出ても、鉢の中にはまだもうひとり男がいます。その男をひっぱり出すと、鉢にはまたもうひとり男がいました。こうして、十七人もひっぱり出して、部屋じゅういっぱいになりそうなのに、鉢の中にはまだひとり、男がいました。息子はびっくりして、

「お母さん、お母さん。どれが本物のお父さんなんだ」とさげびました。すると、鉢の中の男が、

「本物の父親は、このおれだぞ。ほかのはみんなにせものだ」といいました。

いったいゼンたい、本物の父親が、どうやって鉢の中から出ることができたのでしょうか。わたしにこの昔話を語ってくれた人も何もいわなかったから、もちろん、わたしも知りません。

—江蘇省灌雲

村上郁再話

資料『中国の昔話』澤田瑞穂訳／三弥井書店